

2025-26年度レギュラーコースカリキュラム報告 —アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下IUCと略記）では、①10カ月間にわたるレギュラーコース、②夏期集中コース、③夏期漢文コースの3種類の集中日本語教育が行われている。本稿は①のレギュラーコースについて報告するものであり、②と③については[結城ほか\(2026\)](#)と[大竹\(2026\)](#)を参照されたい。

本年度レギュラーコースは、2025年9月1日から2026年6月5日までの40週間、学生55名（うち博士課程在籍中または博士号所持者10名、修士課程在籍中または修士号所持者22名、その他23名）を指導した。常勤教員11名と非常勤教員11名が指導にあたった。

2 レギュラーコースの概要

40週間のレギュラーコースは4学期に分かれており、最終週に開催される卒業発表会によって締めくくられる。今年度の第1学期は9月1日から10月24日までの8週間、第2学期は11月4日から12月23日の7週間+2日、第3学期は1月13日から3月6日までの8週間、第4学期は3月23日から6月5日までの11週間であった。前期（第1学期と第2学期）は主に《日本語》を意識し学ぶことに比重がおかれ、後期（第3学期と第4学期）は各学生の専門や関心領域に近い《内容》を日本語で取り扱うことに比重がおかれる。

毎日の授業は午前と午後に分かれる。前期の午前は文法など言語の形式面・機能面を重視し、午後は内容重視の授業で聴解、読解、発話等の総合的な言語の運用力を高める。後期は午前にも内容重視の科目が追加される。授業時間は、50分を1コマとして、午前2コマ、午後2コマである¹。

今年度IUCで開講された授業は以下の通りである。第1学期の午前は「文法・待遇表現²」、午後は「総合運用Ⅰ」。第2学期の午前は「接続表現」「統合日本語Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅱ」。第3学期は午前の「統合日本語Ⅱ」が全学生の共通科目であるが、同じく午前の「選択A」「選択B」、そして午後の「総合運用Ⅲ」は学生の関心に沿った選択科目である。第1学期から第3学期までの金曜午後は「総合運用」の授業は行わず、原則、学生の自習時間とした（「寺子屋」と呼称）。第4学期の午前は「統合日本語Ⅲ」「選択A」「選択B」。午後は「プロジェクトワーク」と「グループ学習」のいずれか1つを選択。第3・第4学期には、随意に履修できるオプション科目、「選択C」「就活指導」も用意された。

2025-2026年度 40週間のレギュラーコース日程

週	10:00-11:50 午前			13:20-15:00 午後（原則水曜なし）				
1	オリエンテーション・試験・面談			面談・避難訓練など			第1学期 9/1-10/24 8週間	
2	文法・待遇表現			総合運用Ⅰ 寺子屋（金曜）				
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9	秋休み1週間 10月25日(土)～11月3日(月)							
10	接続表現 統合日本語Ⅰ			総合運用Ⅱ 寺子屋（金曜）			第2学期 11/4-12/23 7週間+2日	
11								
12								
13								
14								
15								
16								
17-19	冬休み3週間 12月24日(土)～1月12日(月)							
20	統合 日本語Ⅱ	選択A	選 択 B	総合運用Ⅲ			第3学期 1/13-3/6 8週間	
21				選択C（水曜）				
22				寺子屋/就活指導（金曜）				
23								
24								
25								
26								
27				個人面談				
28-29	春休み2週間 3月7日(土)～3月22日(日)							
30	統合 日本語Ⅲ	選 択 A	選 択 B	プロジェクトワーク/ グループ学習			第4学期 3/23-6/5 11週間 授業は実質 8週間	
31				選択C（水）就活指導（金）				
32								
33								
34								
35	GW休み1週間 4月29日(水)～5月6日(水)							
36	統合 日本語Ⅲ	選択A	B	GWの前と同様				
37								
38								
39				試験5/25月、発表準備				
40				発表6/1-2 面談6/3-5 修了6/5				

3 ICTの活用状況

3-1 教育・業務で用いたICT技術・サービス

授業用資料や事務的な各種情報の掲示と宿題の提出・採点のためにはGoogle Workspace for Education Fundamentals³を、試験のためにはQuilgo⁴を、そして教職員同士の日々のやりとりにはSlack⁵を利用した。

教材の配布にあたっては、デジタルファイルと紙（プリントならびに書籍）を併用した。特に、第2学期の文法クラスで使用した独自テキスト『接続表現5.0β』はIUCで初めて全内容をGoogleドキュメントで作成し、練習問題も含めて単一のファイルに収録した⁶。

自習用オンライン教材としてはWebKIC⁷ならびにRepeaTalk（リピートーク）⁸を用いた。前者は漢字学習プログラムのために、後者は「文法・待遇表現」「接続表現」「統合日本語」「選択B 話す」「選択B 仕事の日本語：就活編」「選択B 仕事の日本語：職場編」の各コースと漢字学習プログラムのための聞き取りや音読の練習、あるいは表現練習に活用した。

教職員会議、教員対学生の個人面談、会話パートナーセッション⁹などではZoom¹⁰を活用した。授業でも、内容の録画を目的として使われる場合があった。また、悪天候などの理由でIUCキャンパスへの通勤・通学が困難な場合、あるいは教員が健康上の理由などで対面授業を行えない場合に緊急的な措置としてZoomでのオンライン授業あるいはハイブリッド授業を行う選択肢を用意した。

3-2 生成AI等活用についての指針

生成AI等の利用について学生に示した指針は昨年度と同じで、以下の通りである。

生成AI等のICTを学生自身の日本語運用能力を高める補助として使うこと、そしてより有効な使い方を試行錯誤することを日本研究センターは歓迎します。

宿題の作文やスピーチ原稿は、最初は必ず自分で書いて下さい。読む宿題はまず自分の力で読んで下さい。もちろん、単語リストが用意されている場合は使ってもかまいません。その後で、授業で先生から生成AI等の使い方について指示がある場合は、それに従って下さい。授業によっては使用が禁止される場合もあります。先生からの指示や禁止がない場合、必要であれば例えば以下のような方法で生成AIを活用することができるでしょう。

- 作文は、自分の力で書いたものをAIにチェックさせる。（その結果は、自分で書いた作文の下に貼り付けて先生に提出して下さい。）

- 読む宿題は、自分で読んだ後でどうしても分からなかった部分についてAIに尋ねてみる。AIに単語リストを作らせてみる。

他にもICTの有効な使い方を見つけたら、それを私たちにぜひ教えて下さい。

4 第1学期の教育内容

月～金曜の午前の授業は「文法・待遇表現」を7週間実施した。午後（6週間）は月・火・木曜に「総合運用Ⅰ」の授業を、金曜に「寺子屋」を実施した。「文法・待遇表現」は全学生を9クラスに、「総合運用Ⅰ」は8クラスに分け、1クラスあたり学生6～8名程度の少人数で授業を行った¹¹。

4-1 午前の授業内容

4-1-1 文法・待遇表現

第1学期午前の授業はいわゆる初級文法の復習を目的とし、特に中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力の向上をはかった。そして、日本語話者と円滑な人間関係を構築できるよう待遇表現を指導した。文法については、IUC作成 *Japanese Grammar*、IUC作成 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese*、『レベルアップ日本語文法 中級』¹²のいずれかを、各クラスの日本語習熟度に応じて使用した。待遇表現については主教材としてIUC作成『[20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション——気持ちが伝わる中級からの日本語待遇表現](#)』（ジャパントイムズ出版）を用いた。

指導には、31日間62コマをあてた。文法と待遇表現の各ユニットをどのようなスケジュールで扱ったかはクラスによって異なるが¹³、概して文法には21日間42コマ程度、待遇表現には10日間20コマ程度の時間を割いた。

4-2 午後の内容

4-2-1 総合運用Ⅰ

月・火・木曜の「総合運用Ⅰ」は主として読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、総合的な日本語運用力の向上を目指した。第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」という単元から開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを活用する機会を提供した。単元の最後には学生が身近な内容について情報交換する機会として、教職員の趣味や経験などについて聞く時間を設け、クラスで報告した。続いて新聞やニュ

ースを教材とする社会性をおびた単元に進み、日本の時事問題を報告・論述するための単語・表現を学び運用する機会を提供した。本コースには、15日間30コマをあてた。

4-2-2 寺子屋

金曜は「総合運用Ⅰ」の授業を行わず、「寺子屋」と称して学生が自由に自分の望む勉強ができる時間を設け、自律的な学習を促した。学生はこの時間、日本語能力の向上に資することであれば何をしてよく、活動の場所も自由とされた。

「寺子屋」は、常勤講師による個別指導やフィードバック、後述する「KIC統一試験」(9-2を参照)や外部講師を招いた講演会、漢字の形やバランスに気をつけながら書き方を指導する「漢字練習会」、ドラマを視聴する活動(第1・第2学期)、読解が苦手な学生のために読む練習を行う「読解教室」(第1・第2学期)など、通常授業の枠に収まらない様々な活動を実施する時間としても機能した。

「寺子屋」には5日間、計10コマ分の時間をあてた。

5 第2学期の教育内容

月～金曜の午前の授業は「接続表現」を3週間、その後「統合日本語Ⅰ」を4週間実施した。午後は月・火・木曜に「総合運用Ⅱ」の授業を7週間行った。第1学期に続いて、第2学期も金曜午後は「寺子屋」の時間とした。第1学期と同様、午前は9クラス編成、午後は8クラス編成で授業を実施した。

5-1 午前の授業内容

5-1-1 接続表現

接続詞に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方(複段落の作成)を指導した。教材としてIUC作成『接続表現』を用いた。クラスによってやや異なるが、15日間30コマ程度をこの指導にあてた。

5-1-2 統合日本語Ⅰ

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、IUC作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を用いた。各課は同一の話題で構成される「文章編」と「会話編」からなる。「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。第2学期は上巻第1課・第2課、及び第3課(文章編)までを扱い、指導には19日間38コマ程度をあてた。このうち12月22日はミニ発表会と称して全学生が7～8分

の発表と質疑応答を行い、学んだ知識や技能を運用する機会とした。

5-2 午後の内容

5-2-1 総合運用Ⅱ

月・火・木曜の「総合運用Ⅱ」では、現代社会の問題をめぐる生の教材、例えば新聞・雑誌記事や報道番組などを使用し、内容理解とそれに基づく話し合いを行った。また、話し合いの内容をまとめたり、取り上げられた話題に関する意見文を書いたりする活動も行った。このような活動を通して、現代社会の問題について日本語母語話者とも話し合える能力の獲得を目指した。教材は、話題シラバスのモジュール型教材群「外国人と国籍」「文化の発信」「教育」「現代の若者たち」「ワーク・ライフ・バランス」「地球環境」「差別と人権」「情報化社会」である。学生の興味や関心あるいは必要性に応じて各クラスが教材を選択し、授業進度も各クラスの理解度に合わせて調整した。ただし、「外国人と国籍」に関しては全クラス必修とした。19日間38コマを指導にあてた。

5-2-2 寺子屋

第1学期に準じる（4-2-2を参照）。第2学期は6日間12コマ分の時間をあてた。

6 第3学期の教育内容

冬休みが明けた1月から第3学期が始まり、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業がコースに加わる。

午前は月・火曜に「統合日本語Ⅱ」、木曜に「選択B」、水・金曜に「選択A」を実施した。午後は月・火・木曜に「総合運用Ⅲ」、水曜に随意科目の「選択C」、金曜に「寺子屋」ならびに随意科目の「就活指導」を実施した。

全学生が受講する「統合日本語Ⅱ」は9クラス編成で授業を行った。選択授業は、受講希望者が多い場合に1つのコースを複数のクラスに分割する場合があった。結果、選択授業の1クラスあたりの学生数は最少で3名、最大で10名となった。

6-1 午前の授業内容

6-1-1 統合日本語Ⅱ

第3学期に全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」のみである。IUC作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』の、第3課会話編（上巻）、第4・第5課（下巻）を扱った。月・火曜の週2日、計14日間28コマ実施した。最終週の2日間はミニ

発表会を行った。

6-1-2 選択A

自分の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組む科目である。学生には第3・第4学期を通じて同じコースを継続履修するよう奨励した。コース選択に迷う学生のため、第2学期中に各コースの説明と質問受付の機会を設けた。本年度は「文化人類学」「政治学」「文学」「歴史学」「法律」「日本学」「メディア表現」コースを開設した。水・金曜、計15日間30コマ実施した。

・文化人類学

受講生の専門、関心を考慮し、第3学期は「フィールドワーク」「植民地とネイティブ」「伝統文化と記憶」「グローバル化」「テクノロジーと人類」というテーマを設定し、具体的な事象から抽象的話題に至る専門性の高い読み物を教材とした。第4学期は各学生が自己のテーマにそった素材を提供し話し合いを進めた。校外学習として、第3学期に「靖国神社と遊就館」、第4学期に三溪園を散策した。

・政治学

大学生向けの教科書を読み、第3学期は日本政治、第4学期は国際政治や日本外交に関する理解を深めた。授業では読み物の内容確認や、学生から出された話題を中心に議論を行った。また、学生が自分で選んだニュースを発表し、議論を進める時間を設けた。第4学期には遊就館と国会議事堂、JICA地球広場で校外学習を実施した。

・文学

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、様々な観点から作品を分析し、話し合いを行った。おおむね2～3回の授業で1作品を読んだ。

・歴史学

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ね、語彙・表現の拡充を図った。歴史学グループと美術史グループに分かれ、それぞれ学生の興味・関心・必要性に応じて、専門書・論文および史料を素材とする読解練習を行った。第4学期後半には、各学生が自分の研究テーマに関する資料を選び、2時間の授業を構成する取り組みを行った。また、横浜中央図書館、国立国会図書館を訪れ、図書館の使い方と資料の探し方を体験したほか、三溪園を散策しながら、明治・大正期の産業・美術・社会貢献について学ぶ機会を設けた。

・法律

憲法を中心に、民法、国際法、刑法、知財法の一部を取り上げ、条文・判例を自力で理解できる技能を育成することで、法律に関わる話題について自ら調べ、それを説明し、自説を展開できるよう指導した。また、裁判傍聴、東京地検見学、日本大学法学部大学院授業体験なども行った。

・メディア表現

1950年代から2020年代までの劇映画、ドキュメンタリー映画を中心に扱い、一部写真、舞台芸術、アニメーションも扱った。おおむね1作品を3回の授業で扱い、併せて作品にまつわる評論・論文・対談などを読んだ。作品を日本社会・文化などの知識を踏まえて多角的に捉えること、作品について語る言葉を深く理解すること、作品について自分の言葉で述べ、意見を交わすことができるようになることを目指した。

・日本学

専門が定まっていない学生、幅広い分野で活かせる日本語力を伸ばしたい学生などを対象に設けられた選択科目である。「選択A」の専門分野を中心に日本研究や日本についての多種多様な教材を用い、知識を蓄え、理解を深めたのち、互いに話し合うことで日本語力の定着を目指した。

6-1-3 選択B

選択Bでは、必要とされるあるいは弱点と思われる日本語力の増強のために、「話す」「聴く」「読む」「仕事の日本語：就活編」の4コースを開講した。木曜の計8日間16コマをあてた。

・話す

第3学期と第4学期に開講された。2学期間連続して受講する学生と、どちらかの学期のみ受講する学生がいた。IUC作成『洗練された会話のための表現集』を共通教材とし、討論におけるフォーマルな表現の習得に努めた。討論、ディベート、発表と質疑応答、音読、即時的なスピーチ、フォーマル・カジュアルなどのスピーチレベルを変えて行う会話練習などの活動、発音・イントネーションの指導などを行った。

・聴く

日本語のリズムや音の特徴について学び、聞き分ける練習を行った。さらに実際のプレゼンテーションや討論の動画を視聴し、話し言葉の特徴を確認することで聞き取り能力の向上を目指した。

・読む

25-26年度は二クラスになった。一クラス目は、中学受験、高校受験、大学受験の問題を中心に、日本の学校教育ではどのような読解力が求められているかを体感し、文章の背景の理解と読解力を上げることを目指した。授業はピア・ラーニングを中心に行った。二クラス目は精読クラスである。文章にある文法や表現などをしっかりと確認し、読み進めながら読解力を伸ばすことを目指した。

・仕事の日本語：就活編

就職活動を考えている学生を対象とし、面接の練習、動画選考の準備、模擬面接などを通して、日本語力をのばしていくことを目的とした。また、担当教員が面接官となり、模擬就職面接を行った。

6-2 午後の内容

月・火・木曜に開講される「総合運用Ⅲ」は、「現代史」「大衆文化」「ビジネス社会」の3コースの中から1つを選ぶ選択授業である。いずれのコースも記事の読解、ビデオの視聴、そしてその内容についての討論などの活動が盛り込まれている。計18日間36コマ実施した。水曜は「選択C」を、金曜は「寺子屋」および「就活指導」を実施した。

6-2-1 総合運用Ⅲ

・現代史

明治から平成時代に至る近現代史を「近代日本の成立と戦争（明治～1945）」「占領改革と高度成長（1945～1970年代前半）」「安定成長からバブル崩壊まで（1970年代後半～1990年代前半）」「21世紀の日本（1990年代後半～現在）」の4期に分け、年表、ビデオ、読み物を利用して各時代を概観した上で、学生が各自興味を持つトピックについて発表した。また、中学・高校の歴史教科書の記述を比較するグループ・プロジェクトを実施した。

・大衆文化

広い意味での日本の「大衆文化」に関して、専門家によって書かれた論文を読み、議論ができるようになることを目標とした。「マンガ・ジェンダー」「映画・アニメ」「ことば・音楽」「ゲーム・物語」という各テーマで資料を読み、映像を見て話し合ったうえで、学生が発表する時間を設けた。コースの最後には、学びを統合する目的で、学生各自が「文化」と思う事象をとりあげ発表した。

・ビジネス社会

本コースにおいては、「ソーシャルビジネス」「起業」「企業の海外進出」等のテーマを取り上げた。新聞記事やビジネス関連のテレビ番組を教材として活用し、実際のビジネスシーンにおいてよく使われる語彙および表現を習得することを目的とした。「マザーハウス」「ドン・キホーテ」「伊藤園」などの企業を取り上げ、それぞれの経営戦略や海外展開の事例を通じて、より実践的な知識を深めた。また、元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏から、日本企業をとりまく環境について学ぶ機会を設けた。

6-2-2 選択C

第3・第4学期には随意科目として「文語文法」「漢文」の2コースを開設し、水曜に実施した。

・文語文法

文語文法の用語や歴史的仮名遣いから導入し、動詞・形容詞・助動詞の指導に進み、文語作品の部分的読解も並行して行った。

・漢文

漢文資料を読む基礎訓練として漢文や漢文体の素材を取り上げ、読み下しと解釈の練習を行った。まず漢文の基礎構文をおさえ、それを応用して短い文章を読んだ。

6-2-3 寺子屋

4-2-2ですでに述べた活動に加え、映画鑑賞、授業復習、会話練習、非常勤講師による講話や校外学習などの機会を設けた。また、次節で述べる「就活指導」もこの時間に実施した。

6-2-4 就活指導

学生の就職活動を支援するため、2月から随意選択科目としてキャリアコンサルタント田中孝一郎氏による「就活指導」クラスを金曜午後に開講し、レギュラーコース終了後の6月19日まで継続した。第3学期中は講義、第4学期からは各学生に個別指導を行い、履歴書・エントリーシート・職務経歴書の書き方の解説や内容の添削・アドバイスをを行った。

7 第4学期の教育内容

プログラム最終第4学期の午前は、第3学期午前と同様の形態をとる。「選択A」は同じコースを第3学期から継続履修するが、「選択B」は「話す」「書く」「仕事の日本語：職

場編」「現代小説」「日本文化論」の5コースから1つを選択できる。月・火曜には「統合日本語Ⅲ」を開講した。「選択A」は水・金曜、そして「選択B」は木曜に実施した。

午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」のいずれか1つの形態を選択することができる。「プロジェクトワーク」は学生と担当教員の相談の上で任意の時間に週1コマ実施した。「グループ学習」には、グループに所属する学生数によって週1コマあるいは週2コマをあてた。随意科目である「選択C」は第3学期と同じコースが用意され、水曜午後に開講した。金曜午後には「就活指導」が実施された。

7-1 午前の授業内容

7-1-1 統合日本語Ⅲ

月・火曜に実施した「統合日本語Ⅲ」では、『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』テキストの未終了部分をカバーした後、日本語の主に形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。学生の到達度、興味、要望に応じて各クラスでそれぞれに教材を選択し、内容に関連した発話活動などを通じて既習事項を総ざらいし、日本語の知識をより確実なものにするとともに、日本語上級者が知っておくべき事項の欠落を補うなどした。16日間32コマをあてた。

7-1-2 選択A

第3学期と同じコースを継続履修する。15日間30コマをあてた。各コースの内容については6-1-2を参照されたい。

7-1-3 選択B

第4学期の木曜は、「話す」「書く」「仕事の日本語：就活編」「日本文化論」「現代小説」の計5コースを開講した。第3学期同様日本語力の増強を図ることも可能であるし、また、まとまった内容のものを読むという目的で「日本文化論」「現代小説」を選択することもできる。8日間16コマをあてた。（「話す」コースについては6-1-3参照）

・書く

随筆から小論文まで、幅広い分野の文章表現力の習得を目的とした。学生は毎週400-600字程度の文章を書き、授業ではそれを学生間で検討・批評した。また、文章表現技術修得のための教材を用いて、毎週異なる視点から日本語のよりよい文章について学んだ。

・仕事の日本語：職場編

ビジネス場面での待遇表現の位置づけで、さまざまな状況における会話練習を行った。

また、ビジネス上のコミュニケーション問題の事例を読み、問題の所在、解決方法についてディスカッションを行った。さらに各自が設定したテーマで、商品やサービスについての説明あるいは企業紹介の短いビジネスプレゼンテーションも行った。

・日本文化論

青木保著『日本文化論の変容』を中心教材とした上で、本文で言及されている様々な日本人論の著作を講読し話し合いをした。

・現代小説

毎回現代作家による短編小説を一つ読み、論じ合った。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、平野啓一郎、長野まゆみ、筒井康隆、本谷有希子、川上弘美、小川洋子の作品を扱った。

7-2 午後の授業内容

第4学期の午後は「プロジェクトワーク」あるいは「グループ学習」が行われた。また第3学期と同様、随意科目である「選択C」を開講した（詳細は6-2-2を参照）。金曜午後には先学期から引き続いて「就活指導」が開講され、レギュラーコース終了後の6月27日まで継続した。（「就活指導」の詳細は6-2-4を参照）

・プロジェクトワーク

各学生が個人またはグループで自己の専門や興味ある分野の主題を選び、教員から個別の指導・助言を受けながら、調査研究や文献の読解などを行う。今年度は26名の学生が選択した。テーマに関しては卒業発表会の内容と重なる部分が多いので、そちらを参照されたい（8 卒業発表会）。学生1人につき週1日、計8コマを指導にあてた¹⁴。

・グループ学習

特定の日本語課題に対して関心を同じくする者が、数名でグループを構成し学習する。今年度は、日本語能力試験の受験準備をするグループ、就職活動の準備をするグループなど6つが成立した。各グループにつき週2コマ（計16コマ）を指導にあてた。

8 卒業発表会

卒業発表会は10カ月間にわたる学習の集大成となる催しであり、年度の最終週に举行される。学生は質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、改まった形式の発表をする。会場を2ヶ所に分け、2日間にわたって開催した¹⁵。

第4学期の午後に「プロジェクトワーク」を選択した学生は、その時間内に卒業発表の準備を進めた。「グループ学習」の学生は第2・第3学期に行われたミニ発表会などの機会に話した内容を洗練させるなどして卒業発表に仕上げた。「グループ学習」選択生の発表準備にあたっては一人ひとりに割り当てられた担当教員が原稿のチェックを行い、発表の予行演習を指導した（学生1人あたり2コマ分の時間をあてた）。

<https://iuc-japan.fsi.stanford.edu/news> の「アーカイブ」に掲載されている夏のニュースレターにおいて、発表題目と要旨を公開しているので参照されたい¹⁶。

9 通年で実施した学習指導と行事など

9-1 評価

9-1-1 テスト

本コースでの学習成果を測定するため、入学直後と卒業時に実力試験を実施した。文法、読解、聴解、漢字の試験、そして面接形式での発話試験を入学時と卒業時に実施し、入学時にのみ作文の試験を加えた。文法・読解・聴解の筆記試験はGoogle FormsとQuilgoを用いて非同期的に実施したが、漢字の試験は手書きで答えさせる問題とGoogleフォームによる選択式の問題を用意し、対面で実施した。入学時の作文テストは、辞書等の使用は認めず、1時間以内にその場で文章を考え、紙に手書きで書いて提出させた。

第2学期末にはASK-ONLINE JAPANが提供する「JLPT（日本語能力試験）オンラインハーフ模試」¹⁷を使用して「中間実力試験」を実施した。IUCでの学習内容とは直接関係のない試験を行うことで、プログラムを半分終えた時点での学生の実力を客観的に判断する目安とした。

9-1-2 個人面談

IUCでは入学時の実力試験結果をもとに第1学期のクラスを編成するが、コース開始に先立ち、午前（文法の授業）のクラス担任教師が自分の受け持つ学生と個別に面談し、試験の結果を踏まえて40週にわたる学習の指針などを助言した。第1学期末にも担任と学生とが個別に面談し、その間の学習ぶりを振り返り、新たな課題を設定するなどした。

文法のクラス担任と学生の個人面談の機会はその後も各学期末に設け、最終学期にあたる第4学期の期末には入学以後10ヵ月間の学習を全体的に振り返った。

9-2 漢字学習プログラムSKIP

プログラム期間を通じて、常用漢字習得のための自律学習プログラム「SKIP (Special Kanji Intensive Program)」を実施している。学生は常用漢字すべてを卒業までに習得で

きるよう毎日教材を独習し、授業以外の時間にクイズ全156回を受けることとなっている。1回のクイズは全10問で、漢字を見て読み方を書く問題とひらがなを見て漢字を書く問題がある。教材にはIUC編集発行の市販教材で、漢字を単独ではなく熟語や例文と共に学習できるよう構成された[Kanji in Context](#)ならびにそのワークブック[Kanji in Context Workbook vol. 1・2](#) (ジャパントイムズ社)と、それらをWebアプリケーション化した「[WebKIC](#)」を用いた。

そして、学習を促すために「KIC統一試験」を作成し、実施した。統一試験では、漢字の書き方、読み方等の問題100問を全学生が受け、点数が午前中の文法クラスで決められた合格点を下回った場合は再試験を受けなければならない。各学期に1～2回、計7回実施した。第1学期から第3学期までは金曜日の寺子屋の時間に、そして第4学期は「統合日本語Ⅲ」の時間内に行った。

クイズを受ける際、学生は白紙あるいは印刷した問題用紙に答えを記入し、それをスキャンするかあるいはスマートフォン等で撮影するかしてPDFに変換し、提出した。iPad + Appleペンシルなどの手書き入力デバイスを使い、問題用紙のPDFファイルに直接答案を書き込んで提出する学生もいた。統一試験を受ける際は、学生は与えられた紙の解答用紙に手書きで答えを書き込み、それを撮影してPDFに変換し、提出した。PDFでの提出は、リモート勤務での採点作業を可能にするためである。

第1学期2週目に50分間、各文法クラスで担任が漢字についてのオリエンテーションを行った。また、第1学期に「ミニ漢字講座」を1回開講し、希望する学生に漢字の書き方の指導や部首の解説を行った。第1～第3学期は、寺子屋の時間に漢字を書いたり漢字を使って例文を作成したりする「漢字練習会」を開催し、教員がその指導にあたった(4-2-2「寺子屋」参照)。

9-3 講演会など、各種の企画や催し

9-3-1 全学生あるいは希望者が対象のもの

全学生を対象とする講演会を1回(12月5日)、希望者を対象とする講演会・交流会・ワークショップを10回(11月1日、11月5日、11月15日、12月10日、12月19日、1月9日、1月23日、2月18日、2月20日、4月10日)開催した。5月11日から22日にかけては、日本大学法学部大学院(法学研究科、新聞学研究科)で開講されている授業を体験受講できる機会も設けられた。また、株式会社東急ホテルズ&リゾーツと日本航空株式会社のご厚意により有志学生を各地の日本遺産に泊まりがけでご招待いただき、学生がそこで見聞したこと、考察したことをIUC卒業発表会ならびに「東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産研究発表会」¹⁸で発表するという「日本遺産プロジェクト」も催行された¹⁹。

このほか、希望学生を対象とした課外活動「書道クラブ」(通年)「古筆・古文書クラ

ブ」(2月～5月)を設けた。「書道クラブ」は書家小林紘子氏の指導のもとで書道の稽古を行い、その成果として卒業発表会会場に作品を展示した。「古筆・古文書クラブ」は同じく小林氏が指導を担当し、手書きの歴史的資料を理解するのに欠かせない「くずし字」の読解練習を段階的に進めた。

9-3-2 日本財団フェロープログラム関連行事

日本財団のご厚意により実施している日本財団フェロープログラム²⁰では、レギュラーコースの授業と活動に加えていくつかの催しを行っている。今年度はIUC卒業生による講演会(12月5日)とワークショップ(10月10日、1月30日)を設け、フェローによる特別発表会を前期(1月20日・1月27日)と後期(5月12日・19日)の2度に分けて開催した。

10 年度末アンケート

年度末には、プログラムの設計・各学期・各科目・教材・ICTの活用などについて尋ねる年度末アンケート(Year-end Questionnaire)を実施し、全学生55名のうち49名から回答を得た。プログラム全体の設計を問う最初の設問「The overall design of the program was」(4件法)への回答は、Excellentが41%(20名)、Goodが55%(27名)、Fairが4%(2名)であり、Poorはなかった。昨年度に引き続き、今年度のカリキュラムも学生から総じて高い評価を得たと言える。

項目別に見ると、教員の指導に対する評価はプログラム全体への評価の高低にかかわらず一貫して高かった。また、基礎固めにあてられる第1学期と学習の集大成である卒業発表会、すなわちプログラムの「両端」への評価も高かった。そして、学生が専門・関心に応じて履修する選択科目群は、個々の学習目標と結びついた科目として特に好意的に言及された。Google Classroomを中心とするデジタル学習環境への評価も高かった。教材の形式(紙・PDF・Googleドキュメント)に関しては、いずれか単一の形式への統一を求める声よりも、学習スタイルに応じて形式を選べること自体を支持する声が目立った²¹。なお『接続表現5.0β』のフォーマットについては、学生・教員を対象とする専用のアンケートを別の実施した。その分析は[秋澤\(2026\)](#)で詳述する。

一方、回答を統計的に分析すると、プログラム全体への評価と最も強く連動していたのは、プログラム中盤にあたる第2・第3学期への評価であった。自由記述からは、その内実として、『統合日本語』テキストを用いた授業で課される課題の意義が感じられにくくなっていること、漢字学習プログラムSKIPが自習に委ねられているため他の課題に圧迫されて計画通りに進めにくいことなどが浮かび上がった。

生成AI等の利用については、利用したという学生としなかったという学生がほぼ半々であった。利用の内容は、自力で書いた作文をAIに点検させるなどの補助的な使い方が中心

であり、多くの学生が「まず自分の力で取り組む」という指針（3-2を参照）に沿った節度ある利用を保っていることがうかがえた。

11 おわりに

年度末アンケートの結果を見る限り、今年度のIUCレギュラーコースも概ね成功裏に終了したと言えるだろう。基礎の徹底から始めて学生各自の専門・関心に即した学習へと自由度を広げていくというカリキュラムの骨格とそれを支える教員の指導は、評価の高低を問わず広く支持されており、今後も維持すべきIUCの資産であることが改めて確認された。

同時に、アンケートは改善の余地がどこにあるかも示している。前章で述べた通り、プログラム全体への評価を左右していたのは個々の授業や教員の質ではなく、中盤2学期の負荷の設計であった。これは裏を返せば、カリキュラムの骨格を変えることなく、運用の改善によって学生の学習体験をもう一段引き上げられる可能性があるということである。ただし、今年度のアンケート結果は今年度の学生に固有のものであり、その意味は長期的な視野の下で慎重に解釈していく必要があるだろう。

IUCは今後も学生の声に耳を傾け、従来からの集中的な日本語教育の枠組みを保ちつつその運用を適宜見直すことで、学生のニーズに即したよりよい教育を模索していく所存である。

（あきざわ ともたろう／IUCレギュラーコース言語課程主任）

注

- 1 ただし、第4学期午後に行われるプロジェクトワーク等の個人指導は週に1コマである。
- 2 IUCでは、敬語だけでなくその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を総称して待遇表現と呼んでいる。
- 3 https://edu.google.com/intl/ALL_jp/workspace-for-education/editions/education-fundamentals/
- 4 <https://quilgo.com/>
- 5 <https://slack.com/>
- 6 ファイルはスマートフォンなど多様なデバイスからアクセスできるようページ無しレイアウトを採用し、章ごとにタブ分けした。また、学生・教員の多様な志向と便宜に配慮し、PDF版と紙版も用意した。詳細は秋澤(2026)を参照のこと。
- 7 https://iucjapan.org/html/call_j.html
- 8 <https://www.repeataik-info.net/>
- 9 「会話パートナー」とは、授業時間外にIUC教材助手と自由な会話ができる機会であ

る。会話能力が弱めの学生のために提供している。

- 10 <https://zoom.us/>
- 11 学生のクラス分けは、9-1-1で述べる入学時実力試験の結果に基づいて決定した。
- 12 許明子・宮崎恵子 (2013)『レベルアップ日本語文法中級』くろしお出版
- 13 水曜は待遇表現、それ以外の曜日は文法、というように曜日によって扱う対象を決めたクラスもあれば、文法テキストの進み具合に合わせて適宜待遇表現を扱う日を挟んでいったクラスもある。
- 14 プロジェクトワーク選択者のうち3名は1つのグループを結成し、グループとして週に2コマの指導を受けた。
- 15 会場として、横浜国際協力センター6階の会議室と同階のGALERIOを横浜市よりお借りした。
- 16 2023-24年度以前のものについては https://iucjapan.org/html/presentations_j.htmlを参照のこと。
- 17 <https://sites.google.com/ask-digital.co.jp/ask-online-try-japanese/contents/%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3%E6%A8%A1%E8%A9%A6%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%AB%E7%B7%B4%E7%BF%92/jlpt%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%95%E6%A8%A1%E8%A9%A6>
- 18 IUCレギュラーコース終了後の6月9日（火）、セルリアンタワー東急ホテルの能楽堂にて開催された。
- 19 本節には記さなかったが、他にも多くのイベントが催された。それらについては稿末の資料「2025-26年度 授業以外の各種イベント」を参照されたい。
- 20 <https://iuc-japan.fsi.stanford.edu/fellowships> の、「日本財団フェローシップ」の項目を参照のこと。
- 21 「Which type of course materials do you find easier to use, paper printouts (紙の教材), PDFs (電子教材), or Google docs?」との質問に対し、No preference16名、Google Docs 14名、紙のプリント11名、PDF 8名という回答があった。No Preferenceが最多であるが、付随する自由記述を見ると、これは「何でもよい」という意味ではなく、場合によって使い分けたいという意味であると解釈できる。

参考文献

秋澤委太郎 (2026)「Googleドキュメントを用いたデジタル教材のフォーマット刷新—設計方針・実装・課題—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第15号 pp.9-28

<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2026_Akizawa_1.pdf>

大竹弘子 (2026)「2026年度漢文夏期集中コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第15号 pp.65-68

<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2026_Otake.pdf>

結城佐織・橋本佳子・青木惣一・平野絵理香・加藤陽子・松田さおり・武藤葉子・杉松香苗 (2026)「2026年度夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第15号 pp.48-64

<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2026_Yuki_et_al.pdf>

【資料】2025-26年度 授業以外の各種イベント

2025年

- 10月10日 (金) 日本財団プログラムフェローシップワークショップ
ジェラルド・カーティス氏
- 10月23日 (水) 外務省訪問
- 11月1日 (土) 横浜市立大学 浜大祭
- 11月5日 (水) 国文学研究資料館ワークショップ
- 11月15日 (土) 東京クロスシティロータリークラブ 等々力クロスカルチャー講座
- 12月5日 (金) 第22回IUCレクチャーシリーズ バラク・クッシュナー氏 ('95卒)
- 12月10日 (水) アーロン・ジェロー氏 ('89夏期コース卒) 引率による寄席観覧
- 12月16日 (火) 鶴岡八幡宮 御神楽拝観
- 12月19日 (金) 外務省訪問

2026年

- 1月9日 (金) 国立歴史民俗博物館見学
- 1月20日 (火) 日本財団奨学金受給生前期特別発表会 (1)
- 1月23日 (金) 米国外交官との懇親会 ハービー・ビーズリー氏 ('07卒)
- 1月27日 (火) 日本財団奨学金受給生前期特別発表会 (2)
- 1月30日 (金) 日本財団フェローシッププログラムワークショップ
アーロン・ジェロー氏

2月18日 (水)	「カケハシ・プロジェクト」
2月20日 (金)	国文学研究資料館ワークショップ
春休み期間中	「東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産プロジェクト」
4月10日 (金)	能ワークショップ 寺井千景氏
5月11日 (月)	日本大学法学部大学院 (法学研究科、新聞学研究科) 体験授業
～22日 (金)	
5月12日 (火)	日本財団奨学金受給生後期特別発表会 (1)
5月19日 (火)	日本財団奨学金受給生後期特別発表会 (2)
6月9日 (火)	東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産研究発表会